

宋拓神鵝蘭高序

附古拓五種

羅振玉題



唐自太宗重右軍書以禊序為右軍平生絕頂  
命當代士書摩崖石志心極勤其傳後世者但有歐  
褚二種蓋歐、褚、虞、夏、魯、公、孫、各體自書之者上  
視山陰與俗工傳其筆墨淺濃肥瘠位置大小拘

法飛跳更妙為宋拓善本有同名咸缺知上因  
不待一一較量其筆畫也此州姜氏藏石二本未成  
本上堂為氏藏石宜和賜諸如本至為善字郭得  
三善本不備宋拓本不可非也  
壬子九月中秋游上堂羅振玉記

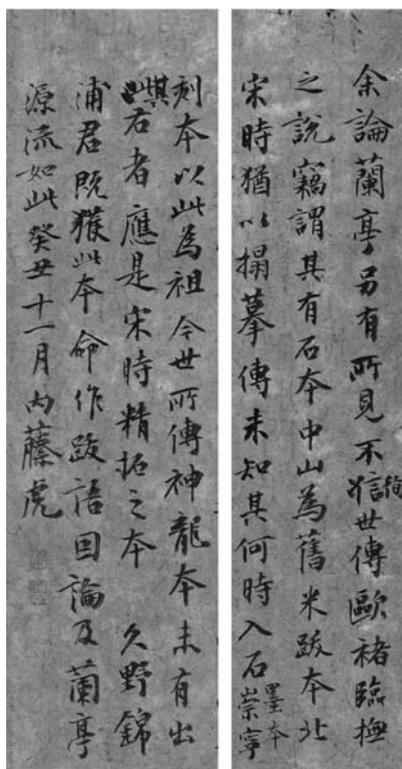


碑法帖拓本の題記・④ 「宋拓神龍本蘭亭序・羅振玉旧蔵本」

図版② 「神龍本蘭亭序」



図版③ 「内藤湖南跋（中央一部省略）」



図版④ 「羅振玉肖像」



大正二年（1913）癸丑の歳に、関東、関西で蘭亭会が開催された。京都では四月十二、十三の両日にわたり京都府立図書館で蘭亭会展が開催された。当時の関西の学者、文人、書家等が集い、王羲之の蘭亭序に因んで各種の名品が展出された。それを報じる当時の新聞によれば、犬養毅、内藤湖南、羅振玉の三家の出品蘭亭序が特に話題になったとある。今回取り上げた「宋拓神龍本蘭亭序」は、内藤湖南の出品とされた拓本である。題簽は、「宋拓神龍蘭亭序 附古拓五種 羅振玉題 「臣王

之印」（白文印）とある。やや淡い肌色の斑模様紙に帖名の「宋拓神龍蘭亭序」は篆書体で、更に小さな行書体で補いの語を書き添え、署名し、小さな印を付している。巻末には、この展覧に合わせて書かれた関西の中国学の重鎮であり、書を善くした内藤湖南の神龍に関する見解が跋文として書かれている。やや行書の筆意のある書風である。その後には、この本の旧蔵者であり、前年中国の混乱を避け、京都に家族と弟子の王国維と共に亡命してきた羅振玉の行書の跋文が書かれている。

羅振玉（1866～1940）は、近代中国を代表する学者であり、古代文字、金石碑帖、書画等多方面の研究において、近代日本の学术界に大きな影響を与えた。書法の各体を善くし、篆刻にも通じた。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

# 書道芸術院 平成の群像 (2013)



雲 3題 書道芸術院秋季展 推薦作家展

## 「大字書と出会って」



## 飯田春香

私の書の目標は？  
言葉のイメージをどう表現、発展させるか？

・線質の変化を追及、強弱、潤濁は？  
・墨色の研究、透明感、深さは？  
・墨と紙の相性を求める

大体以上を念頭に取組んできました。一字書が生まれたのは外国の人にも日本の書がわかるようにと、手島右卿先生が始められました。(現在は大字書)

最初「燕」という字を見たときの造形に素晴らしさに感動したことを今も鮮明に覚えています。

ここ数年は自分にあった素材、字があり始筆から収筆までスムーズに運筆ができますが、合わない字となると途中で筆が止まってしまいます。そのような時、諦めてやめてしまうか、それとも何とか克服したいと挑戦し続けるか思案するところですが、いつか達成したいものです。

そこで今、私が取り組んでいる字、素材は「雲」です。いつの頃から特別意識して書いてきた訳でもありませんが、気が付くとこの字を書いている自分があります。昨年の推薦作家のときも「雲

三題」として発表しました。色々な雲を連想し表現を変えて書いている時は爽快感があり楽しく書けました。これを一つの区切りとし新しい素材を目指したいと思いましたが、いや、まだ表現する余地があると思いつたので執念深く書き続けようかと思ったりしています。そして年数を重ねるたび、どう変わっていくのか楽しみたいと思います。

ところで一般に言う良い書とはなんだろう。自分の好きな書とは違う？「良い書」とは人の心を感動させる、刺激を与える、又新しい感動を呼び覚ましてくれるとある。良い書とは一つの世界があり、人間らしい色がある。そしてその人の香りがあると言う。個性が作品に表現されていると言う。リズムと調和を保つには訓練と蓄積が必要とあります。

果たして、今の私にそのような作品が出来るのだろうか？自分の色を出すことができるようになるのだろうか？私の目指す書はこの先どうなっていくだろうか。このような作品が出来るまで道のりは険しいと思いますが、目標として努力していきたいと思っています。それには線の鍛錬等課題は他にもたくさんありますが、最終目的は自分に納得できるもの、これが私の代表作だと思えるもの、心に響く、心に残る書が出来れば大変幸せだと思います。

# 書のひろば

理事長 辻元大雲

## 一般財団法人毎日書道会理事会

本年4月1日より一般財団法人として新たな発足をした毎日書道会の最初の定評議員会が6月14日午前、如水会館にて開催され、平成24年度の事業報告、決算の報告承認、理事・監事の補充選任などが審議され決定した。

同日午後、理事会を開催、主な審議事項は左記の通り。

- ・理事監事の補充、顧問推薦(新任者)
- 顧問(名譽) 宮崎紫光、渡辺墨仙
- 監事 松井玉箏(かな)
- 総務 遠藤 彊(篆刻)

評議員 山本大廣、秋元秋雨、三浦白鷗、田向良歌、佐久間康之、宮本博志

(本院関係は変更なし)

毎日書道顕彰 二氏に

「芸術部門」石原太流(漢字)

「啓蒙部門」小原道城(漢字)

・2014現代の書 新春展開催予定

銀座和光会場(顧問・理事監事・文部科学大臣賞受賞者)

セントラル(60歳以上)

会期 平成26年1月5日～13日

・2014毎日新春チャリティー書展  
会場 東京銀座画廊美術館(8階)

会期 平成26年1月6日～12日  
価格 31500円、52500円、73500円  
・その他諸案件(略)

## 公益社団法人全日本書道連盟 理事会・総会開催

公益社団法人として2年目を迎えた全日本書道連盟は6月6日、上野精養軒で総会を開催、教育問題をテーマとしての講演会、懇親会もにぎやかに行われた。

総会内容

・平成24年度事業、収支決算報告

・任期満了による役員改選

顧問就任(新) 關 正人、貞政少登、田中鳳柳

理事長 樽本樹郎(再任)

副理事長 石飛博光、清水透石

星 弘道(再任)

常務理事 鈴木春朝、中村雲龍(再任)

今村桂山、田中節山(新)

理事(新任のみ) 飯山素木、角元正

燦 仲川恭司、永守蒼穹、真神巍堂、吉澤鐵之

監事(同) 伊藤欣石、室井玄翁

・助成金給付事業

・24年度7件、25年度2件(5月現在)

・展覧会後援事業 103件

・助け合い募金 394件協力

日赤、中国大使館へ

・日中国交正常化40周年記念日中代表

作家展 日本での開催は3会場で開催済み。中国北京での開催が遅れ目

下開催準備中。

・会員加入状況

本院より新たに10名加入

・書写書道教育への要望書を書美術振興会と関係機関の連名で文部科学省へ提出、今後精力的に運動を進める。

講演会「小学校における書写の指導」

講師 都小学校書写研究会会長

並木玲子氏

総会に続き教育問題をテーマとし表記の講演が行われた。東京都内小学の書写指導の実態が具体的な実践例を基に報告され、実技指導者の絶対的な不足の中、懸命な取り組みがなされている実態にやや安心しながらも、将来的にどう変化していくか予断を許さない厳しい状況であることにはわりはない。

連盟会員の教育サポーターなどの積極的な協力、支援活動が望まれるとの要望もあった。

各学年における書写に関する事項を1・2学年では姿勢や用具の持ち方を正しく、文字を丁寧に筆順に注意して書く。

3・4年では毛筆を使用して文字の組み立て方、配列、筆圧に注意して書く。

5・6年では用紙全体との関係、書く速さ、目的に応じた筆記具の選択、毛筆の穂先の動きと点画のつながりを意識して書く。

これら学年ごとの指導のポイントを交え分かりやすくお話しいただいた。詳細は次号連盟会報に掲載される予定。



講演会風景

## 東博・出光両館にて特別展開催 「和様の書」東博にて

会期 7月13日～9月8日

「和様の書」とは、中国からもたらされた書法を日本の文化の中で独自に発展させた、日本風の書。平安時代中期以降に社会制度や文化の和風化が進み、日本独自の仮名が生まれ、仮名と漢字が調和した「和様の書」が開発されていった。本展では、三跡と呼ばれる小野道風・藤原佐理・藤原行成をはじめ日本を代表する能書の作品や四大手鑑など至宝の名品が展観される。

「文字の力・書のカラ」出光にて

会期 7月6日～8月18日

平安時代から現代に至るまでの魅力的な優品、約80点を厳選。特に書の中に秘められた絵画的な表現の展開にも注目し、書表現における遊戯、遊楽の軌跡を探る。

# 漢字 (四)

佐藤 菜扇

特殊聯の中に「聯式屏」というものがあります。楹聯形式を採用して、紙は分割せず楹聯と條屏形式を兼ねた物です。両形式の形式美を兼ねさせようとしたもので清初から始まりました。

先程、千葉日報書道展の作品締め切りがありました。半切以内。縦作品とする。※対聯作品は不可とすると規定にありました。そこで、「聯式屏」と「龍門対」を取り入れた作品にしてみようと思いました。「龍門対」の形式で作品を発表するのは今回が初めてです。

鄧石如が「龍門対」の形式で作品を残している「鄧石如題碧山書屋」を素

千葉日報書道展



佐藤菜扇書

材としました。書体は金文で。構成を

考え、自分で半切に野線を入れました。

①滄海日赤城霞蛾眉雪巫峽雲洞庭月影

蠹煙瀟湘

②雨武夷峰廬山瀑布合宇宙

奇觀繪吾齋壁 ⑤平成癸

巳

④絳相如賦屈子離騷收古今

絕藝置我山窗 ⑥菜扇書

③少陵詩摩詰畫左傳文馬遷

史辭濤箋右軍帖南華

①②⑥は筆を進めて行った

順番です。落款を入れるス

ペースがあまりなかったの

で短落款になりました。

## 21世紀の書

### — 私 の 主 張 —



大平邑峰書

# 現代詩文書 (四)

大平 邑峰

詩文書の素材は、現代のものが身近で分かり易いことはいうまでもありませんが、古事記や梁塵秘抄、山歌鳥虫歌、江戸時代の俳諧といった古代から中・近世の庶民的文学の中にもおもしろく楽しいものや日本語として美しいものがあり、現代風に表現しても楽しくかけるものもあります。

この場合、「現代詩文書」、「近代詩文書」と言っているのかどうかはわかりませんが、日本語で書かれているものを現代人の感覚で書表現することによって、多くの人に書を身近に感じてもらうことがこの部門の大きな目標ではないかと思っています。そのように考

えると、古くからの文学から現代のものまで、また、普段の生活の中の何気ない言葉や格言・ことわざ等々いろいろなタイプの素材を手がけることができると思います。あっと思いうような素材との出会い、それをどのように表現するかあれこれ考えるのが詩文書の楽しいところだと思います。

写真の作品は、枕草子の一節です。「遠くて近きもの 極楽舟の道 人の中」(意) 遠いようで近いもの、それは極楽、舟路、男女の仲 何気ないものの方がおもしろく感じられます。

創立40周年記念  
日本詩文書作家協会書展

会期 平成25年6月4日(火)～9日(日)  
会場 東京セントラル美術館



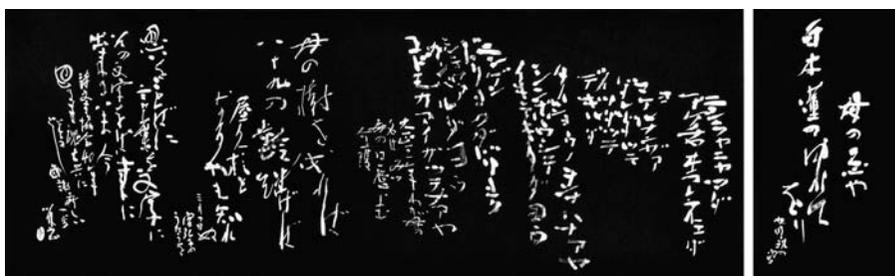
前田咲乃「前田咲乃の句」

砂本杏花書

鷹羽狩行「流れ星」



辻元大雲書



妹土屋明珠・宮弘子、母のことばと和子の自作「紺紙銀泥 今を書く=いのちの絆」 飯高和子書



樋口健司「冬の岬」

坂本素雪書



西東三鬼「西東三鬼の句」

小竹石雲書

高橋新吉「じゃがいも」



浜田堂光書



田中冬二「ロマンチックの夕暮」 上村榮芳書

北原白秋「地球」



大平邑峰書

自詠「揚羽その軌跡」



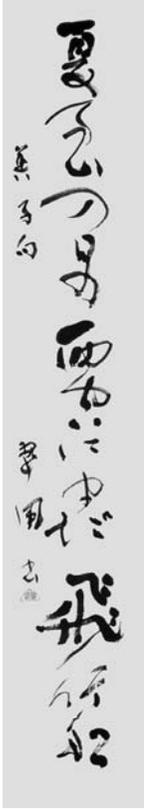
尾形澄神書

自作「罪の予感」



大隅晃弘書

宮本英子「宮本英子句」



最首翠風書

草間時彦「牡丹」



佐久間幸扇書

ふけとしこ「啄木鳥」



小池蹊舟書

渡辺水巴「紫陽花」



齊藤理舟書



ていんがら 米盛つぐみ「海界 (うなさか) 金木和子書



宗左近「宗左近詩」 熊谷宗苑書



与謝野晶子「短歌 (出典「冬柏」二卷六号昭和六・六)」 齋藤雨城書



増田龍雨「俳句」

白石和楓書



石川啄木「虚白集」より

佐藤無極書



花谷和子「花谷和子の句」

田中梨梢書



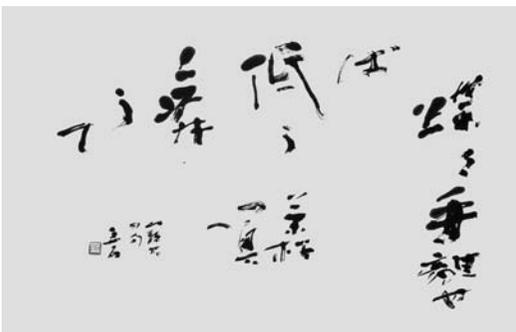
野見山朱鳥「朱鳥の句」

田村鄭雲書



中村草田男「中村草田男の句」

種谷萬城書



種田山頭火「蝶」

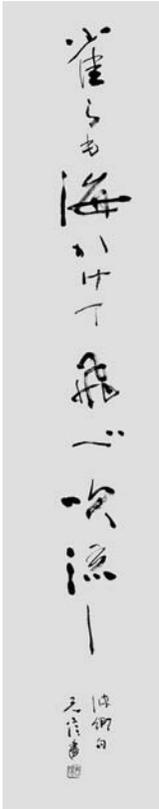
畑中弄石書



高野ムツオ「高野ムツオ句」

長井四枝書

石田波郷「吹流し」



村山元信書

最首洋子「最首洋子の歌」



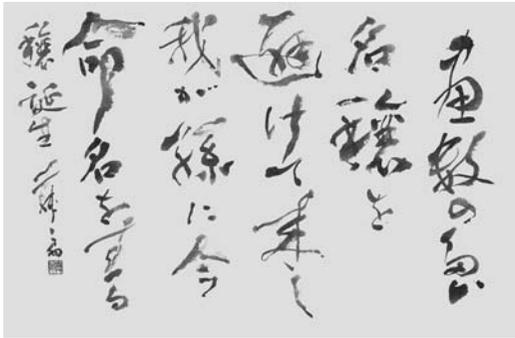
町山美扇書



山下喜子「山下喜子の句」 半田藤扇書



片山由美子「みほとけの」 広瀬舟雲書



自作「穰くん誕生」 森舞扇書

由利葉子「沙羅の花」



由利芳葉書

木村ヒロ子「風のような別れ(抄)」



山田梓江書

《院関係出品者名》  
 辻元大雲・飯高和子・砂本杏花  
 小竹石雲・浜田堂光・坂本素雪  
 上村葉芳・大隅晃弘・大平邑峰  
 尾形澄神・金木和子・熊谷宗苑  
 小池蹊舟・最首翠風・齋藤雨城  
 齊藤理舟・佐久間幸扇・佐藤無極  
 白石和楓・田中梨梢・種谷萬城  
 田村鄭雲・長井四枝・畑中弄石  
 半田藤扇・広瀬舟雲・町山美扇  
 村山元信・森舞扇・山田梓江  
 由利芳葉

雁塔聖教序（唐 褚遂良）①

漢字研究部臨書課題

Ⅱ（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

〈解説〉

褚遂良（五九六～六五八年）は政治家であり書家。字は登善。杭州錢塘（浙江省）の人。河南県公から河南郡公に封ぜられたため「褚河南」と呼ばれることもある。太宗に仕えて諫言をよくし、後の高宗の教育にもあたっ

た。しかし武則天を皇后に立てることに反対。武則天の恨みを買って、死刑に処されたが、遺詔により死刑は免ぜられた。その代わり潭州都督、桂州都督と左遷され、最終的に愛州（現在のベトナム中部）にまで流されそこで死去した。

（編集部）

※落款を必ず入れる

署名、もしくは〇〇臨  
（押印のみも可）



而易識者。以其／有象也。陰陽處／乎天地而難窮

古筆鑑賞

筋切

(伝藤原佐理)

①

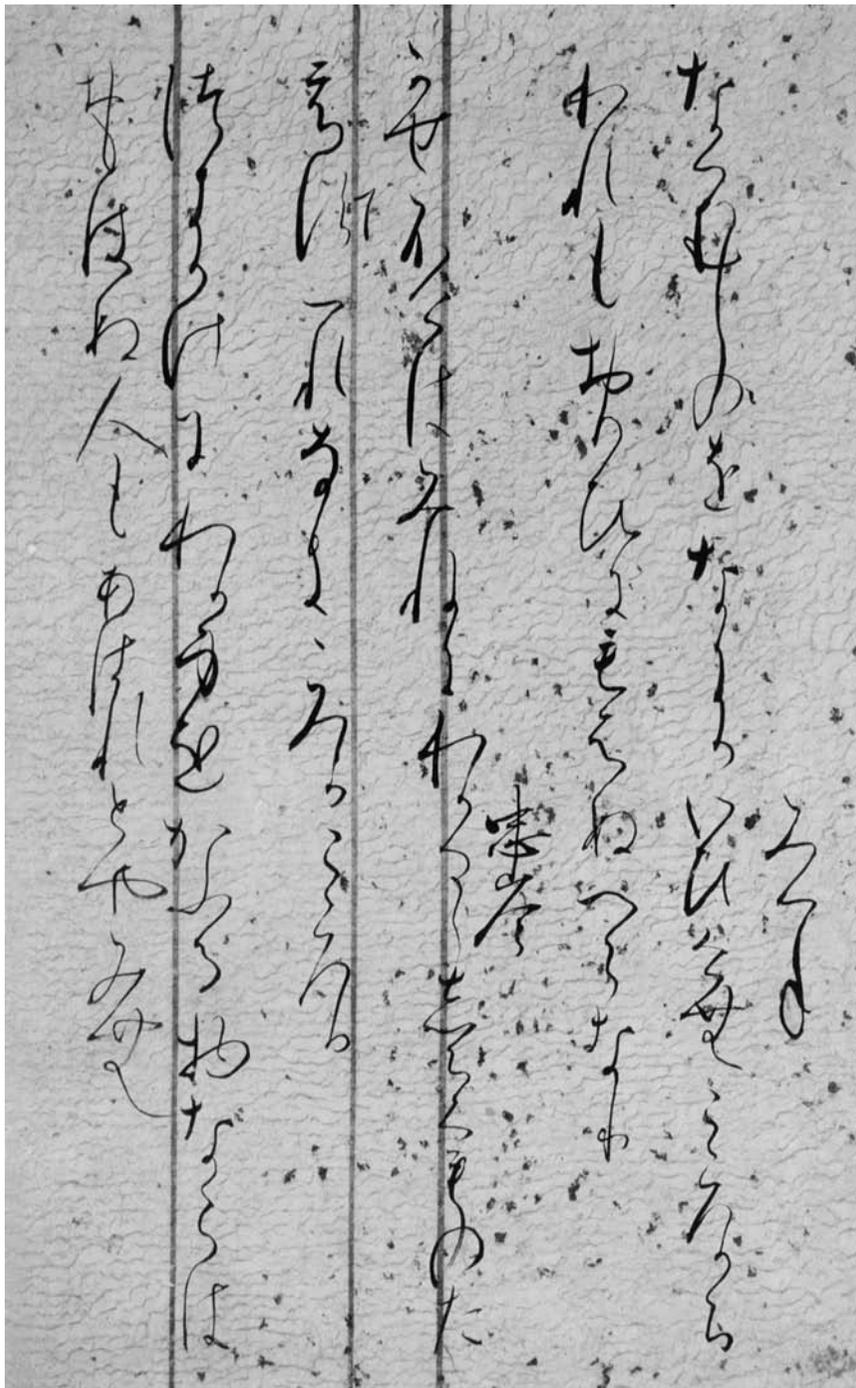
⑪②

〈よみ〉

なつむしのをなにかいひけむころから  
 われもおもひにもえぬべらなり  
忠岑  
 可<sub>不</sub>かぜふ<sub>不</sub>かばみ<sub>不</sub>ねに<sub>不</sub>わ<sub>不</sub>か<sub>不</sub>る<sub>不</sub>し<sub>不</sub>らく<sub>不</sub>もの<sub>不</sub>た  
 え<sub>不</sub>ず<sub>不</sub>つ<sub>不</sub>れ<sub>不</sub>な<sub>不</sub>き<sub>不</sub>み<sub>不</sub>が<sub>不</sub>こ<sub>不</sub>ろ<sub>不</sub>か  
 つ<sub>不</sub>き<sub>不</sub>か<sub>不</sub>げ<sub>不</sub>に<sub>不</sub>わ<sub>不</sub>が<sub>不</sub>身<sub>不</sub>を<sub>不</sub>か<sub>不</sub>ふる<sub>不</sub>物<sub>不</sub>なら<sub>不</sub>ば  
 おもはぬ人もあはれとやみむ

〈解説〉

「筋切」は「古今和歌集」の断簡で、元は全二十巻。上下二冊に書写した冊子本。装丁は、もともと糊で重ね合わせた粘葉装であった。下巻は早くに分割されたが、上巻は昭和27年まで名古屋の関戸家に完本のかたちで伝存していた。



(90%縮小)

かな研究部  
 臨書課題

・競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

・用紙は半紙普通判(料紙可)

〈たて長に使用〉別紙を裁断して貼付も可。  
 半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

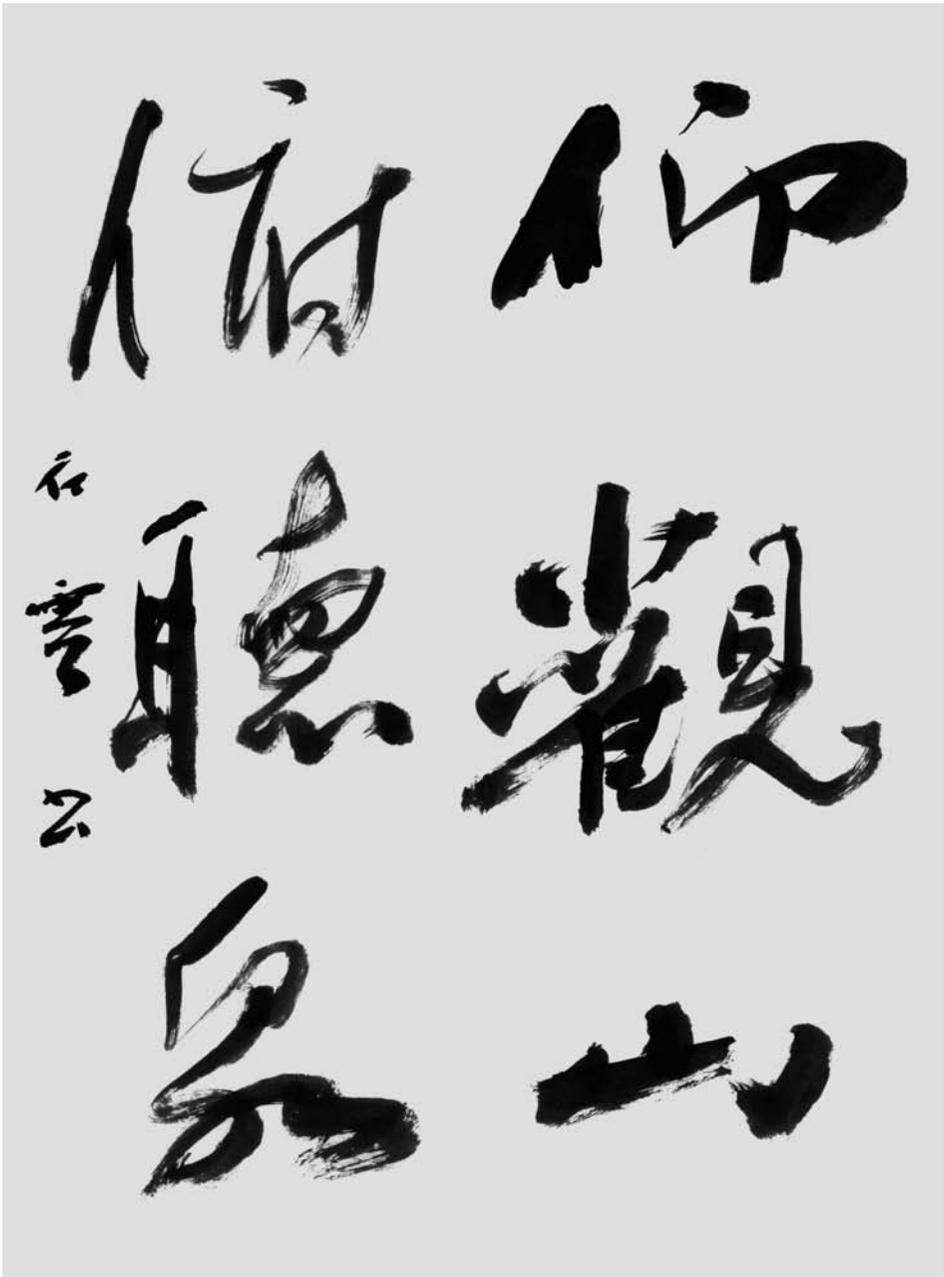
特別研究部  
 臨書課題

毎日展公募サイズ以内・縦横自由  
 左記の掲載以外にも可

※落款を必ず入れる  
 署名、もしくは  
 ○○○臨  
 (押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【八月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小竹石雲 選書



仰観山俯聴泉

よみ (仰いで山を觀俯して泉を聴く)

書体 自由

## 習い方解説 (四)

小竹石雲

仰観山俯聴泉 (白居易)  
(仰いで山を觀俯して泉を聴く)

律動感のある運動で六文字に挑戦してみました。字は小粒ながら生き生きとした作品を心がけました。

書風は根底に、羲之をおき、少し爽快感をねらってみました。

気をつけた点

- ・ 弾むような律動感を出すためには、終筆で弾力をつかった筆先の立ちあがりが大切です。各々の字形も偏平にし、重心を下げることで安定した親しみ感が湧いてきます。
- ・ 爽快感を出すため、強弱の變化をつけながら少し速めに書き、紙は比較的滲みの少ないものを使用してみました。

漢字規定 秀級以下 【八月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

東福青篁選書

窓下有清風

青篁

窓下有清風

よみ (窓下清風有り)

書体Ⅱ楷書

## 習い方解説 (四)

東福青篁

窓下有清風  
(窓下清風有り)

(白染大)

炎暑の中でも、窓べからおとずれるすずしい風は、心地よく感じられます。

今回は画数が少ない、五文字の表現です。

書聖、東晋の王羲之の書と伝えられ、細楷として有名な「黄庭経」を参考に致しました。

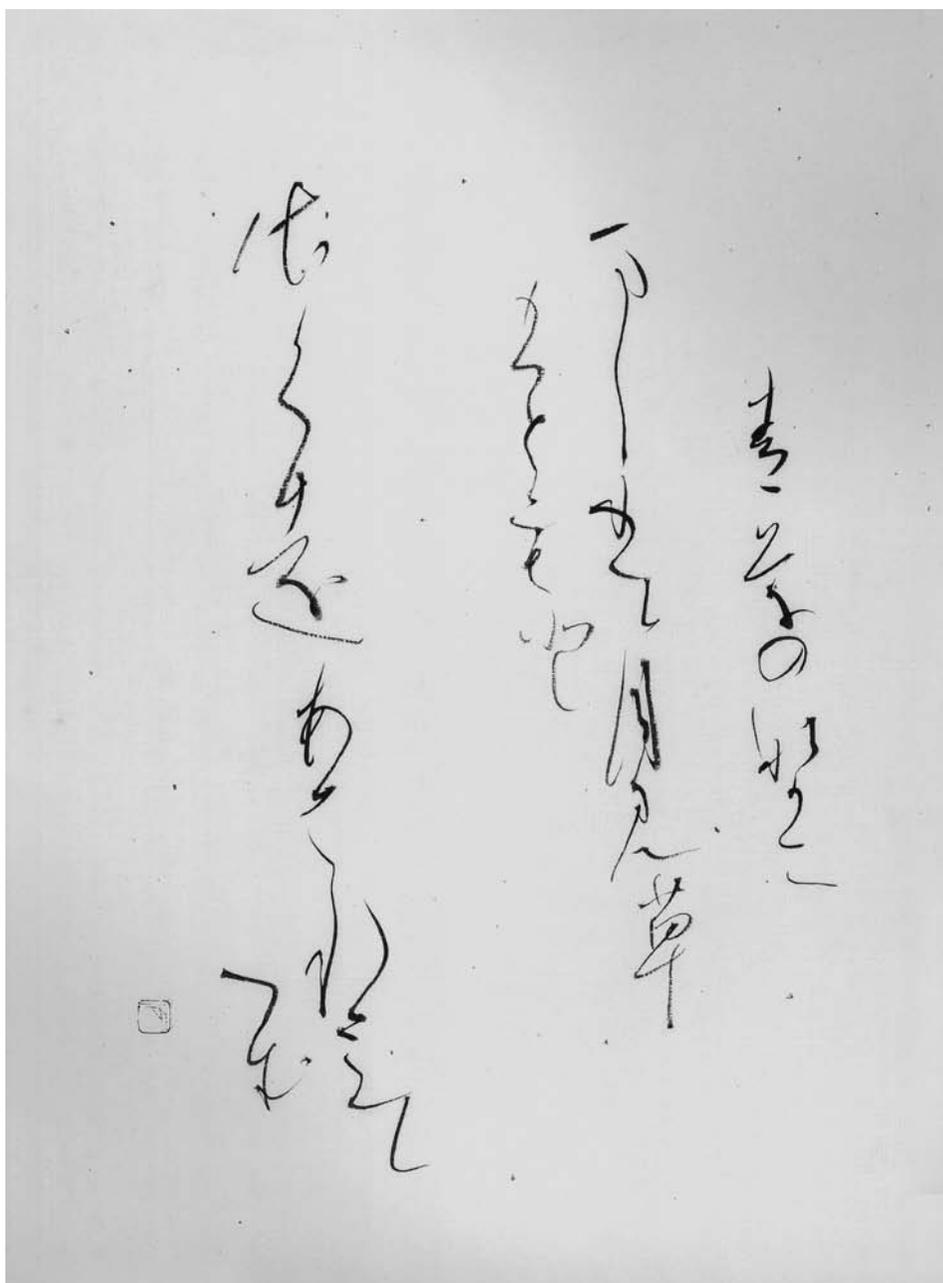
道家の不老長寿・養生訓が述べられたもので、穏やかで上品な楷書です。

藏鋒で、鋒先を線の中に包み込むように運ぶと、線が「丸味」をおび太・細の豊かな表情になります。

字形は少し小さくし、回りの余白によりスッキリ感ができるように心がけました。

力んで固くならないよう、ゆったりとした気持で書いてみましょう。

かな規定 初段以上 【八月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可） 大辻多希子選書



### 習い方解説 (四)

大辻 多希子

青草あおくさのなかにまじりて月見草つきみくさ  
ひとつもと咲くをあはれみて摘む

(若山牧水)

作品の題材を選ぶ時、好きな作者、俳句、和歌などから書きたいものを選びます。ただし作品になりにくいものもあります。

まず最初に行の構成を考えますが、単に文字を並べて書いてもかな作品としての美的要素に欠けるので、くり返しの字には変体がない、漢語を生かすなどで変化をつけま

す。隣り合う各行の墨量が同じでは重苦しさや、さびしさで単調になります。潤筆に対しては渴筆を配列することによって、強弱の響きあいの美が生まれます。

また、含墨したからといって、書き出しから急に強く書くのではなく、徐々に墨を出すように筆圧に気を配りながら書き進むことが大切です。

よみ方 青草のな(那)か(可)に(二)ま(万)しり(利)て月見草

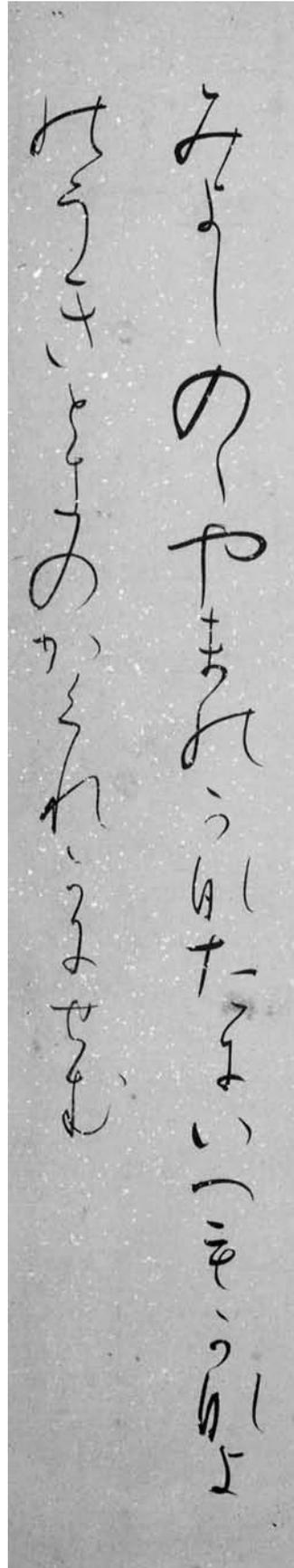
ひ(悲)とも(毛)と(登)さ(佐)く(久)を(遠)あは(者)れみ(ミ)てつむ

創作

かな規定 秀級以下 【八月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野 切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 みよしのゝやまの(能)か(可)な(那)たに(尔)いへも(毛)が(可)な(那)よ

の(能)うきとき(支)のかく(久)れが(可)に(尔)せむ

かな条幅規定 【八月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

見越雪枝 選書



よみ方 橘のに(尔)ほ(本)へる香か(可)もほとゝぎ(支)す(眷)

な(奈)く(久)夜の雨に(耳)移ろひ(悲)ぬらむ(无)

創作

### 習い方解説 (一)

見越 雪枝

橘たちばなの匂におへる香かかもほととぎす  
鳴なく夜の雨あめに移うつろひぬらむ  
(大伴家持)

変体が入ることに、下字と自然な流れで連綿が出来上ります。又、かなだけでは変化がつきにくいので、漢字を取り入れます。

一行目橘を漢字にしたので、二行目なくを平がなにし、やや下げ煩うるさくならないようにしました。

不明な箇所は誤字のないように字典を引用して下さい。

\* たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【八月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

村山元信 選書



天河てんか只在南樓上 不借人間一滴涼  
(天河はただ南樓の上なんろうのうえに在り 借さず人間一滴じんかいてきの涼りやう)

(釈宗勸)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【八月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

前田龍雲 選書



閑園多好風  
(閑園好風多し)

(張籍)

書体||自由

### 習い方解説 (四)

村山元信

七月は七夕。昨今の異常気象は我々世代のつけ回したことになるものであるに違いない。二十世紀、豊かさを求めたはずのさまざまに動きが、逆に大きな価値を失うことにもなった。見落としてきた文化(書もそのひとつ)が生み出す価値へ軸足が大きく移り始めていることを一人ひとりが気づいているのだろうか。さて、草書は点画の省略多く作品づくりもまた難しい。

### 習い方解説 (四)

前田龍雲

初唐の三大家褚遂良、雁塔聖教序の書風で書いてみました。意味は「ひとけのない庭では気持ちのよい風が吹いている」です。「褚法」は繊細で行書の雰囲気を持ち、抒情的で抑揚に富み、線の太細、強弱に変化があります。余白を意識して爽やかになるよう心がけてみました。

線路は続くよどこまでも  
野をくぐり山越え谷をくぐり  
遙かな町まで僕達の楽しい  
旅の夢つないでる 舟錦書

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

## 習い方解説 (四)

川島舟錦

この歌を歌った頃、島国高知を走る  
汽車は、果てしない未来に続く乗り物  
のように思えました。蒸気機関車の頃  
は、東京まで十五時間かかったとか。

さらに、龍馬が江戸に向いた頃は  
…と想像してみるといかに勇猛果敢な  
人物であったか。

「日本を今一度せんたくいたし申し候」  
のことは、誰も心をとらえて離し  
ません。

童謡には、それぞれの夢や思い出が  
いっぱいつまっています。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

# 木一プロ作品 各部総評

NO. 625

漢字部 師範 小山内谷玲

ねばりある筆致が柔らかかなリズムを醸し出し、構えの大きさと共に懐抱広い作となった。

◎漢字部総評 筆力とは単に運筆のリズムだけでなく、墨や紙、筆の質も関係する。字形などの形状を生かすのも筆力です。(大雲評)



漢字条幅部 師範 井上 洋硯

躍動感溢れる闊達な作品。行書単体の参考作品を行草作品として味付けした。潤濁のバランスも佳。

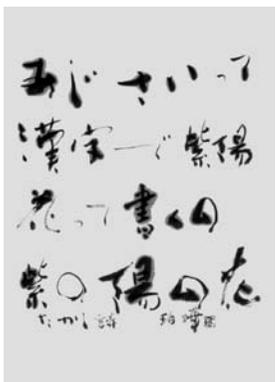
◎漢字条幅部総評 参考手本の解説に「別れの句」とあった。詩意を帯びて創作出来たら……。課題にしたい。(翠風評)



現代詩文書部 特選 金漬 珀燐

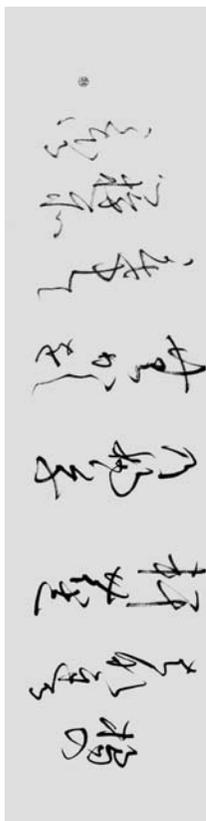
淡墨に依る横構成、潤筆、濁筆のバランスが見事で、行間の間合がすばらしい。

◎現代詩文書部総評 表現豊かな作が多く、意欲が感じられたが、選考の厳しさに直面。(無極評)



かな条幅部 準師 真下美佐代

すっきりとした滑らかさでバランスもよい。潤筆の柔軟さに比して濁筆が少々硬いので一考下さい。



前衛書部 特選 井上 恵子

大胆な構成と墨色の変化を上手に組合んでいる。迫力も見せながら全体が明るい作である。

◎前衛書部総評 違いを求めすぎ過剰表現にならないこと。落款は墨書せず印のみが可。(蓮紅評)

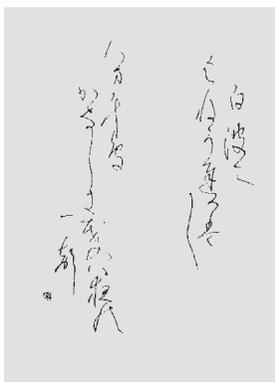


◎かな条幅部総評 漢字を行か草か悩むところですが、橋は草書の方がかなに合います。誤字を防ぐためしっかり確認を。(洋子評)

かな部 師範 松田ち代子

字形、墨色、墨量よく穏やかな作品です。その中に存る確かな自己主張が深さのある魅力です。

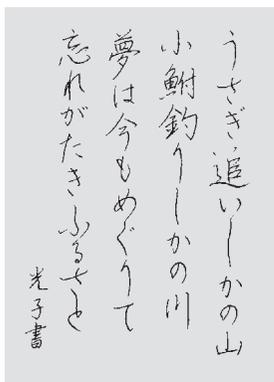
◎かな部総評 紙面に対するバランスを考慮して貧弱にならない配慮をすること。又、解説の旧字体は重んじて使用のこと。(明子評)



ペン字部 師範 石井 光子

堂々とした書き方で懐が広い。線も充実し最後まで一貫した流れはすばらしい。

◎ペン字部総評 行書の流れある作品が多かったが、それゆえ弱く感じる作もあった。級の出品者は楷書の方が字形が整う。(蒼玄評)



特別研究部優秀作品(特選)

漢字 (大雲) 江本興舟 「五言二句」



江本興舟書

180×60cm

現代詩文書

(翠柳)

白地清柳

「春の風」

◆春の情景を叙べた詩の内容と細太、潤濁の変化をつけた朴訥な表現が一致し、叙情性豊かな作品。

(萬城評)

◆行の流れに独特のゆらぎを取り入れ潤濁の変化が音楽的なリズムを醸し出している。明るく楽しい作。

(大雲評)

◆超濃墨の潤濁を生かし、太細の変化を出しながら訥々と綴る。間の取り方に工夫をにじませ抒情的。

(洋子評)

◆濃墨で筆の持つふくらみを巧みに使いわけ動きのある作で、美しい思いをさせて頂きました。

(倫子評)



白地清柳書

180×60cm



浅見 由紀子 書

60×180cm

◆重厚な線質が独特のリズムを生み、気迫のこもった作。行の通貫性がやや乱れており更に努力を。

(大雲評)

(倫子評)

◆骨気に満ち溢れ、小細工なしに筆を運んだ好感の持てる書。艶のあるリズムも白眉。落款の位置は？

(洋子評)

(萬城評)

前衛書

(行徳)

浅見 由紀子

「活力」

◆体の動きで表現された線が紙面の動きを呼び出した感がする。墨色に少しにごりを感じるのが残念。

(倫子評)

◆三本の太い堅の線が基調で、そこに蠢く生命の息吹を感じる。それに付した曲線は少し物足りないか。

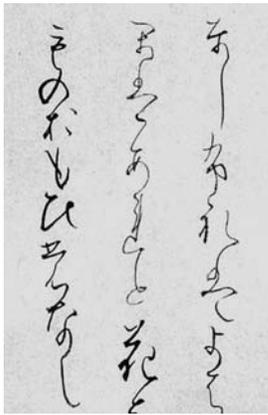
(萬城評)

◆ダイナミックな太々しい縦の動きが存在感を見せている。付随する横への動きが中途半端な感あり。

(大雲評)

◆右側の塊と細かい動きが少々不自然な感もあるが、無造作に見える荒げた筆触に魂の表出を見る。

(洋子評)



拡大



平野 笛舟 臨

30×135cm

臨書 (千葉)

平野 笛舟

「臨関戸本古今集」

◆技術的にも難しい関戸を、原本をよくとらえて筆の開閉が見事。連綿のリズムも自然に熟れている。  
(洋子評)

◆取り組み易い様でこれほど難しいかなはないのでは。リズムを壊す事なく最後まで美しい姿です。  
(倫子評)

◆仮名古典の定番である関戸本をよく観察し、原本の味を生かしている。太細の変化、全体のまとまりもよい。  
(大雲評)

◆潤濁、太細、疎密の変化多彩で情感に溢れた原本を忠実に、然もリズムミカルに書く力量は流石です。  
(萬城評)

臨書 (千葉)

竹浪 叙舟

「臨争座位稿」

◆思い切った一行臨書で強弱の変化を鮮明に見せる。書き出しの豊かさに対し、渴筆部の広がり不足。  
(大雲評)

◆かなり書き慣れているのか、一行の臨書に無理がない。特に書き初めのゆったり沈着した趣が魅力。  
(洋子評)

◆一行で争座位を表現するのは勇気がいると思う。心の纏りが巧みに筆力に表れうまく力強さが出た。  
(倫子評)



178×45cm

竹浪 叙舟 臨

前衛書

浅野 彩紅

「空へ」

◆筆の動きによって出る墨だまりが紙一杯に表情を見せて効果的。紙質を変えてみると滲みに変化も。  
(倫子評)

◆少々マンネリの構成が多い前衛書の中で、余白の流れが眩しく光る。多面的な筆毛の表出にも敬意。  
(洋子評)

◆上部から下部へのうねるリズムが紙面を広く大きく見せて妙。淡墨の微妙な変化が妖しい雰囲気醸す。  
(大雲評)

◆淡い青墨の滲みが美しい。運筆の速度の遅速に因る墨色の濃淡、潤濁が効果的。前衛書ならではの美。  
(萬城評)



180×60cm

浅野 彩紅 書

創作の部(48点)

漢字—6点

かな—1点

現代—21点

篆刻—0点

前衛—20点

臨書の部(35点)

漢字—31点

かな—4点

総出品点数

83点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

墨宣 鏗木 梅道

恵雅 板橋 雅邦

〔現代詩〕

千葉 渡辺 秋湖

うる 今関 心筆

游水 荒川 空華

大雲 長島 憚雨

〔前衛〕

大拙 荒木 孫功

蓮紅 大友 紅蓉

青蓮 鮎名 遥

〔臨書の部〕

〔漢字〕

もく 森田 藤谷

大雲 阿部 恵泉

玄象 大鹿 洋江

若葉 工藤 山房

大雲 小倉 梅扇

英峰 佐藤 桂華

〔かな〕

郷州 福永 滋扇

漢字研究部  
(争座位稿)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



市川 柳 苑

漢字研究部 特選 市川 柳苑  
争座位稿は情趣に富んだ素晴らしい草稿であり、筆者の心情を表現するには難易度の高い古典です。ここに取り上げた臨書は、ゆったりと伸びやかで、争座位稿の特徴を十分に捉えた秀作だと思えます。

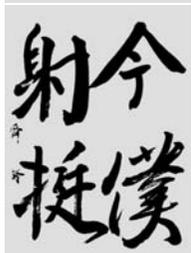
◎漢字研究部総評

この古典は人によって見方や感じ方が多種に及ぶものとみえ、幅広い表現の臨書に出会

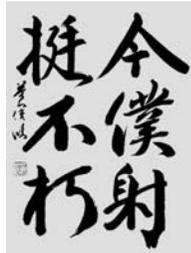
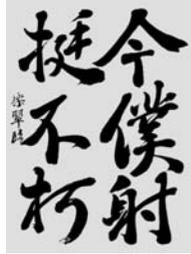
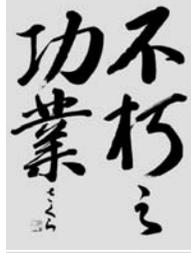
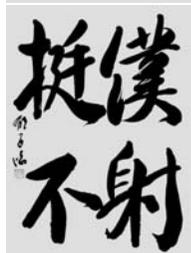
いました。従って表現方法の学習には適した古典であると思います。  
全体的に伸びやかな思いきった表現の臨書が多く寄せられたことは良かったです。しかし、細部までもう一步突き詰めて研究してほしい作品も少なからずあったことは残念です。特に「人臣之極」の臣の縦画を途中で切り、下に点を打った作品が目立ちました。



例之端發者百察  
之帥長徒辰之末  
人臣之極地今僕射  
挺不朽之功業當



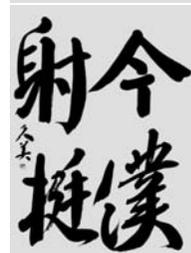
桜文 瑶舜 蘭孫  
江江 翠鈴 秀功



蒼樂 さ郁 狐雅  
信翠 ら子 无邦



範麗 莉白 百真  
代流 紗篁 雲蘭

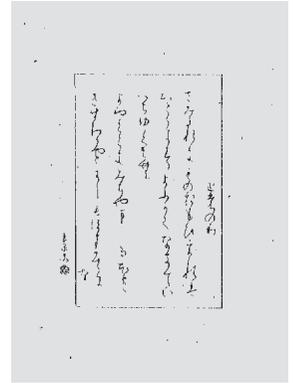


白光 翠久 貴玉  
麗彩 江美 大泉

かな研究部  
(関戸本古今集)

選評 庄司紅邨

今月のホープ作品



後 藤 良 泉

かな研究部 特選 後藤 良泉  
 関戸本古今集の美しさの一つにあげられる行と行との呼び合いを見事に表現し、又墨量の濃淡を良く捉えています。ゆったりと流れる線も見事でした。  
 ◎かな研究部総評  
 初歩の方へ、古筆を忠実に書くのが大事な基本です。次の段階として、かな連綿の呼吸、墨量の見定め、原本の文章、歌のリズム感の理解と進みます。



真紀雅 紅春勇 飛喜佑 美千萩  
 蘭子泉 霞華介 龍代子 知子峰光

かな研究部成績表

高たか	澄か	千春	椿翠	も翠	秀	A渡千玉和立有澄苑陽秀紅紅春電竜澤高髙高京電玉大電	特選	後藤良泉														
櫻梅岩飯安青	津瀬磯田藤	佳祥園	和子	和子	生方由美子	戸村澤	千田	福澤	深野	岩崎	鈴崎	茂崎	渡高	宇木	會根	吉田	長谷川	小野	大谷	電泉		
有も	昌苑	竹扇	上泉	竜泉	高春	高井	幕橋	洞張	土書	大一	書松	幕泉	高泉	詢崎	生島	梓元	竹扇	如月	大坂	玉祥	上泉	
石新	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤	洋藤